

金承哲著『神と遺伝子——遺伝子工学時代におけるキリスト教』

(教文館、二〇〇九年、二七九頁)

芦名定道

本書は、「キリスト教と自然科学の対話」というテーマに長年取り組んできた筆者金承哲氏(金城学院大学人間科学部教授)が、その研究成果に基づいて執筆した労作である。近年の遺伝子工学の進展は、ヒトゲノム、ヒトクロン、ES細胞、iPS細胞といった話題と共に、現代社会の多方面において大きな関心を集めているが、その影響はキリスト教思想にも及んでいる。筆者は、こうした問題状況がキリスト教の信仰と神学とにとっていかなる意義を有するかについて、数多くの関連文献を参照しつつ、正面から取り組んでいる。すなわち、「遺伝子工学的試みをめぐる論争は、既存の神学的倫理のパラダイムを脱構築する必要性を示唆している」(72頁。以下頁数のみを記載)という現代神学の思想的現状認識に立って、「神を演じる」というフレーズを手がかりに錯綜した問題状況を整理分析し、現代神学が直面する問いを神学的体系全体の中で深化させること、これが本書の目的にほかならない。本書は、「遺伝子工学とキリスト教」というテーマに関して日本語で書かれた最良の研究書と評することができる。

以下、各部各章の内容を概観することによって、本書の内容を紹介することにしよう。まず、第1部「クロン羊と遺伝子」は、「第1章 クロン羊の誕生」と「第2章 ドリーと『ドリー』以上」の二つの章から構成されているが、ここでは、ヒトクロン問題の歴史的背景を明らかにすることによって、それが宗教的また神学的問いであることが示される。クロン羊ドリーの誕生は、当初から神学的問題として受け取られ、広範な感情的反発を引き起こしたが、こうした反応の背後には、「人のアイデンティティはその人の遺伝子によって決定されるという観念」(35)が存在しており、筆者は、この「遺伝子決定論(genetic determinism)」こそが最大の誤謬の一つであることを繰り返し指摘する。本書は、クロン技術が長い農業における「育種」の営みの延長上に位置すると同時に、遺伝子工学が、「古いアトム・粒子モデル」から「遺伝子コード」というメタファー(DNAという「巻物」)へと実在理解を転換させることによって、客観的学としての実証主義的科学であることを超えて、イデオロギーとして機能することになったことを論じる。このイデオロギーとしての遺伝子工学は、ドリーの事例が示すように、人間の自己理解における存在論的根拠に触れることによって感情的反発を引き起こし、さらには人間の自己理解の根源としての神理解にも及ぶことになる。「ドリーは形而上学的・神学的出来事として取り上げられ始め」(46)、こうして、クロン技術への賛否の議論が、「神を演じる」というフレーズをめぐって展開されることになるのである。筆者は、このフレーズを手がかりにして、現代神学の錯綜した議論を読み解こうとする(第3部)。

続く第2部「科学と神学と倫理」には、「第3章 キリスト教と分子生物学」と「第4章 『神を演じる』について」が含まれる。ここでの課題は、第1部で示された、「人間とは何か」(人間の自己理解)をめぐる遺伝子工学(さらには科学的研究全般)と「神学的地平との絡み合い」(56)に関して、そもそも問われるべき事柄は何かを明らかにすることである。筆者は、遺伝子工学的試みをめぐる論争が既存の神学的倫理のパラダイムを脱

構築することを要求している点を指摘するが、それは、まず人間を神や他の生物から区別している「境界線」をめぐる議論として提示される。「存在の大いなる連鎖」「自然の梯子」という階層的な世界秩序の枠組み——古代から近代までの西洋の实在理解の基礎——において人間存在を規定してきた境界線が、今や流動化し、脱構築されつつあるのである。「境界線」の問いはまさに倫理的問いであり、その流動化はモノーが指摘した「古い価値体系」「基準」の喪失という事態を指示している。境界線を流動化させる働きにおいて、ドリーは、「コペルニクス、ダーウイン、フロイトの業績にたとえられる」(16)。「神を演じる」というフレーズは、こうした「科学者たちの境界侵害(transgression)」についての警告(18)と解することができるが——「神の主権」の侵害と「母なる自然」に対する反逆——、重要なのは、感情的な反応を引き起こす「神を演じる」という曖昧なスローガンの意味内容を明確化することなのである。これが、第3部のテーマにほかならない。

第3部『神を演じる』をめぐる3つの立場と脱中心の人間」は第1部と第2部をいわば序論的考察として展開される本書の本論である。ラムジーらによるヒトクローンへの反対論(第5章『神を演じてはならない』)とフレッチャーらによる賛成論(第7章『神を演じよう!』)とを両端にして、その中間に位置するテッド・ピータースらの立場(第6章『神を演じているのか』)を詳細に論じつつ、これらの議論への総括がなされる(第8章「ヒトクローンと脱中心の人間」)。

「神を演じてはならない」論(反対派)の代表として取り上げられる「ラムジーの神学的倫理の基盤」は、神学的倫理とは「価値の無限の中心」「垂直的地平」である神についての正しい認識から出発しなければならない、という主張に見いだすことができる。この絶対的基準が失われるとき、水平的次元での倫理的違反である「神を演じる」行動が生じる。ラムジーの神学的倫理あるいは神学的人間学については、バルトの創造論や契約理解からカトリック的な自然法理解への展開が指摘できるが、彼の「技術全般に対する非常に悲観的態度」は、「創造の秩序」「神のデザイン」(＝境界線)を踏み越えてはならないとする点で一貫している。本書ではこうしたラムジーの議論が、L・カス、カトリック神学(『生命のはじまりに関する教書』『いのちの福音』など)、ヨナス(道徳的实在論)など広範な立場において共有されていることが詳細に論じられる。これら議論に対する筆者の批判は次の二点に集約できる。「人間の尊厳」「アイデンティティ」を遺伝子的同一性に帰着させることは遺伝子決定論であり、自然主義的誤謬(遺伝子という自然的所与から道徳的判断を導出する)にほかならない。また、「キリスト教倫理の基盤は、『創造の秩序』の中ではなく、むしろ未来への開放性において求められ」(15)ねばならない。

この反対派の対極にあるのが、フレッチャーを典型とする「神を演じよう」論(推進派)の神学である。フレッチャーを理解する上で重要なことは、「状況倫理」論に遡るフレッチャーの議論が、「『神の死の神学』(Theology of Death of God)との関連の中で把握されねばならない」(210)という点である。「神を演じる」ことへの批判は、神を「隙間の神」に貶めることであり、むしろ現代人は、「時代遅れの弁神論」から自らを解放し、与えられた責任を果たすことを通して人間らしさを実現しなければならないのである。「その責任というのは、自らの責任の下で新しい世界を造り出さねばならない」ということを意味し、『隙間の神』の代わりに積極的に『神を演じる』ことを意味する(216)。しかし、この推進派の賛成論に対しては、フレッチャー自身が自覚しているように、「人間が生殖技術を

人間的に利用できるほど信用できるかどうか(220)という点が問われねばならない。

これらの二つの立場の中間に位置づけられるのが、第7章で論じられる一連の議論であり、それはヒトクローンが果たして「神を演じる」ことになるのかと反語的に問いつつ、科学的営みを神の創造活動に協力することとして積極的に受け入れようとする立場である。これは、反対派と推進派の厳密な中間というよりも、推進派により近い慎重派・穏健派(現時点でのヒトクローン技術の実施は支持できないが、研究の継続を勧める立場)と言うべきかもしれない。取り上げられるのは、ロナルド・コールターナー、フィリップ・ヘフナー、そして、テッド・ピータースなどの思想家であるが、ここでは、ピータースの議論を中心に紹介したい。筆者がもつとも注目していると思われるのがピータースだからである。とくに注目すべきは、以下の見解(コールターナー)である。「神は、遺伝子的変化を成すために、自然的過程を通じて働く。神は、意図的な遺伝子的変化を成すために、人間を通じて働く」(163)。これは、いわゆる「継続的創造」の問題であるが、ピータースは、「創造された共同創造者」(ヘフナー)という観点から、人間は神の継続的創造の協力者として創造されたと主張する。神の継続的創造は、生命進化のプロセスはもちろん、人間の文化行為をも通じて推進されるのである。つまり、自然は完結した実在ではなく、神の新たな創造行為——奇跡的治癒行為者としてのイエスにおいて示されているように(170以下)——に開かれているのであり、したがって、自然的所与としての遺伝子と「人間の尊厳」や「魂」とを同一視するような「遺伝子決定論」は神学的に間違っているのである。「人間のアイデンティティは人間と神の関係においてあるものであり、決して遺伝子によって決定されるものではない」(174)。つまり、魂とは、人間の自然的属性ではなく、神との関係における人間を意味している。ピータースのこのような自然理解の背後にあるのは、パネンベルクの「終末論的倫理」「先取りの倫理」にほかならない。「キリスト教倫理は、約束された神の国に対する私たちのヴィジョンに基づくもの」(188)であって、神の終末論的未来を現段階で先取りしつつ、神の創造行為に協力することが人間に求められているのである。「神の似姿としての人間の尊厳は、実は創造されつつあるもの」(191)なのである。

以上の第3部の分析を締めくくることが、第8章「ヒトクローンと脱中心的人間」であり、ここに筆者の結論が示される。筆者は、遺伝子工学を、近代以降進展しつつある人間の脱中心化プロセス(地動説・無限宇宙論から進化論を経て現代に至る)の到達点として位置づける。「神の代わりに自分自身のうちに万物の『中心』を置いていた近代的人間は、今度はその『中心』としての自己が複製される状態に直面して啞然としている」(215)。このプロセスは、伝統的なキリスト教的世界観の「終焉」(228)を意味するものであるが、求められるのは、「『神を演じる』というメタファーの下での遺伝子工学とキリスト教神学の対話」(225)において、キリスト教神学の徹底的な自己変革を試みることなのである。そのために、「フレッチャーの楽観主義的人間論」を批判しつつ、ピータースの示す可能性を追求するということが、本書における筆者の基本的な主張と言えよう。

最後に、本書に対する若干のコメントを行うことによって、この書評を締めくくりたい。

(一) 本書においては、遺伝子工学が生み出した問題状況が鮮やかに描き出されており、神学的に問われるべき争点は何か、それはいかなる意義を有しているか、といった問題の

核心が明確に提示されている。また、表面的な事態の推移の記述や技術的な説明にとどまることなく、思想的な掘り下げが十分になされている。読者は、本書を通して、現代神学の現状についての的確な理解が得られると同時に、神学思想のおもしろさに触れることができるであろう。

(二) たとえば、遺伝子工学は、進化論にまで至る近代的な人間の脱中心化のプロセスの内に位置しており、それは、近代以降における階層的秩序の流動化、そして人間を他から区分する境界の曖昧化を極限にまで推し進めている。ヒトクローン問題でしばしば論じられる人格の尊厳性に関しては、それが神との関係概念であり、伝統的な実体論的理解は適切ではないことが、説得的に論じられた。

(三) 筆者自身は、「神を演じる」に関する第二の立場（「神を演じているのか」）に立っているように思われるが、第一の立場（「神を演じてはならない」）の問題点の指摘とそれに対する批判が明確であるのに比べて、第三の立場（「神を演じよう」）への批判は不明確であり曖昧であると言わねばならない。それは、ポストモダンへの批判的論点はやや希薄であり、また第一の立場の有する真理契機について議論がなされていない、という点に繋がっている。ポストモダンも脱構築も、モダンの流動化の状態記述（あるいは流動化の手法）として評価できるものの、必ずしもモダンを超えたそれ以上の何か（たとえば、終末論的未来）を指し示しているわけではない。ピーターズやパンネンベルク思想ラインと、ポストモダンの脱中心化の思想ラインとは相互にずれを内包しており、それをどのように理解するのかがという点が、本書では曖昧なままになっている。

(四) また本書の記述からは科学への批判的関わりという論点が後退しているとの印象を受ける。キリスト教思想には、「キリスト教と自然科学」の関係性という観点から、えせ科学・疑似科学が及ぼす問題に対するいわば預言者的批判とすべき態度が求められてはいないのであるか。とくに、「神を演じよう」論に対しては、この視点からの批判的検討が不可欠と思われる。

(五) 第二の立場からの神学体系の脱構築・再構築という課題はきわめて明確に提起されてはいるものの——問い直しは、創造論、人間論、受肉論、救済論、終末論のような「神学的主題」(loci theologiae)を包括する「神学的体系全体」に及ぶとされている(108以下)——、それがどのような神学構想に結実するのかの自身については十分な展開が見られない。たとえば、実在の階層的静的描像から歴史的動的描像への転換、あるいは創造された共同創造者といった論点は興味深いものではあるが、これらが神学体系全体にいかなる帰結をもたらし、そこからいかなる生産的な神学思想が形成されるかは、問いとして残されている。筆者の今後の思索の進展に期待したい。